

インド児童文学の現在

平成 21 年 12 月 13 日

講師：シュニル・ゴンゴパッダエ

はじめに

皆さんこんにちは。今回は国際子ども図書館の御招待で講演をする運びとなり、たいへん光栄に思っております。実際に拝見してみますと、こちらは本当に素晴らしい組織で、このようなところでお話することを重ねて喜ばしく思っている次第です。

ご存知のとおり、インドは多言語の国家ですが、それぞれの言語に大変豊かな児童文学が存在しております。児童文学の作家も数多くおりますが、日本のように中央で統括する組織が存在しないことを大変残念に思います。インドに帰国しましたら、日本の国際子ども図書館のような組織を是非とも作るべきだ、と関係者に働きかけたいと思います。やはり子どものために何かをすることがなければ、文化というものは育たないのではないかと思います。

多言語国家インド

ではさっそく私の講演を始めましょう。スライドにありましたように、今回の私の講演のタイトルは「インド児童文学の現在」です。先ほど申し上げましたが、インドは多言語国家で、インドには 800 以上の言語が存在しています。その中には、山深いところで生活している部族の言語のように、文字を持たないものもあります。800 あまりある言語のうち、22 の言語がインド政府によって公用語として認められていますが、私どもアカデミーでは、この 22 の言語に 2 言語を加えた 24 言語を扱っております。アカデミーの会長として、私はこれら全ての言語の文学を花開かせたいと思っておりますが、やはり一人の力では限られているところがございます。ということで、それぞれの言語の専門家を置きまして、私自身はベンガル語の専門家としてベンガル語で書かれる文学の発展に寄与するために努力しております。ベンガル語は日本の皆さまにあまりなじみがないかもしれませんが、ベンガル語で書かれたタゴールの作品についてはよくご存知なのではないでしょうか。

人間の子どもの特徴

さて、まず子どもという存在についてなのですが、子どもというものはすべからく、生まれた瞬間からグローバル・シティズン（世界市民）であるということを忘れてはならないでしょう。子どもは真に子どもであるうちは、国家を持たず、言語も持たず、いかなる宗教にも関連付けられてはいません。動物界の住民であるという以外の属性を持たないことによって、子どもたちだけが人間としての真の平等を享受しているのです。しかし年を重ねていくにつれ、人間というものは自分たちの間に区別や違いを生み出し始めます。あ

らゆる生き物の中で、人間の子どもは自立するまでに最も時間がかかります。子牛は生まれて間もなく立ち上がり、走り回ります。虎の子どもは、生後 6 か月のうちには茂みの奥に隠れることを学びます。二足歩行の動物の中で人間に最も近いと言われるチンパンジーですら、母親の懷から離れて 6 か月もしないうちに木から木へと移動するようになります。しかし、人間の赤ん坊は生まれてから何か月もの間、無力に横になっているだけです。人間の子どもは食べ物を手に入れる術も持たず、自分の身を守ることもできません。これら生きていくのに必要なものを得るためには、父親や母親、あるいはそれに代わる保護者に完全に頼るしかないのです。そしてこの必要を伝えるために子どもができるのは、泣くことだけです。

言葉の獲得とお話の伝承

長い幼児期の間、子どもは肉体的に成長するだけでなく、知性においても成長していきます。この長期にわたる幼児期のおかげで、人間はどの動物よりも想像力、分析力、そして推理力においてはるかに優れているのです。子どもは火や水、夏、冬といった基本的な情報を周りの人々から身に付けていき、そしてまた母親や父親、もしくは母親に代わるだけかから言葉を学んでいきます。まさにこの言葉の中に子どもは初めてお話やそれに類するものの種を見出すのです。そして言葉とともに子どもの想像力は育ち、お話を熱望するようになります。ごはんを食べるのを嫌がっていた子どもにお話を読んであげると、すんなりごはんを食べることがしばしばあります。言うことを聞かず、駄々をこねている子どもにも、お話を聞かせてあげるとおとなしくなることがあります。そしてなによりも、子どもを寝かし付けるには、寝る前のお話が欠かせません。子どもというものは同じお話を何度も聞くことに飽きることはありません。

昔、大家族が一般的だったころには、祖父母が主にストーリーテラーの役割を担っていました。普通、親というものは生活に追われて忙しいものです。代わりにおじいさん、おばあさんが喜んで孫をひざの上に乗せていろいろな話をし、そして子どもたちは人生というものや外の世界を、こうしたお話から感じ取っていきました。だからこそ、長い年月をかけてこれらの物語が作られ、口から口へと伝わり、広がっていったのです。こうしたお話は何世代にもわたってこのようにして受け継がれてきましたが、この口伝えというありかたのために、世界中のほとんどすべての言語において、このような子ども向けのお話がいわゆる古典の中に見出されることはありませんでした。今日では、このように口承の中だけで受け継がれてきた物語を、文字にしておく試みが行われています。

現代においては、大家族はほとんど消滅し、核家族が主流になりました。そのため、子どもたちが祖父母との楽しい団らんを過ごすことも、ほとんどなくなってしまいました。だからと言って、幼い子どもたちが魅力的なファンタジーへの興味を失ってしまったわけではありません。実際のところ、ごく幼いうちにこうした物語を聞くことの意義には、計り知れないものがあるのです。だからこそ、さまざまな種類の絵本がまっさき出版され

たわけです。こうした絵本の中には、簡単に破れないようにプラスチックに印刷されたものまであります。最近では、こうした絵付きの物語で人気があるのは、面白い漫画か、テレビやDVDで見るアニメになってしまいました。しかしこれらのものは、子どもたちを一時的に夢中にさせるだけで、彼らの心をじっくりと育てることもありませんし、想像力を養うこともありません。

子どもの読書と児童文学作家

6, 7歳になりますと、子どもたちはアルファベットを覚え、自分で何でも読めるようになりますが、そうすると本を欲しがるようになります。本は子どもたちの物語への渴望を満たしてくれるだけでなく、彼らは本を通して家族の外のさまざまな人々を知ることになります。こうして子どもたちは、ゆっくりと外の世界を感じ取っていくのです。家族の中に祖父母のどちらかが住んでいたとしても、今の子どもたちはおじいさんやおばあさんから話を聞くよりも、本を読む方を好むようです。

印刷機の登場に伴い、児童文学も文字で書かれ、出版されるようになりました。現代においては、さまざまな言語において子どもたちのためだけに書く作家が存在します。しかし大人向けの作品を書く作家と比べますと、児童文学の作家は名声を得ることも少なく、経済的にもあまり恵まれません。また、児童文学に対する特別な賞もありません。にもかかわらず、子どもたちのためだけに作品を書くことに時間を費やす作家たちは、子どもたちへの深い、大きな愛情から、そうしているに違いありません。実際のところ、すべての児童文学は、そうした愛情の産物であると考えられるのです。多くの作家は自分の子どもを頭に描いて作品を書きます。そして、ほかのすべての子どもたちを自分の子どもと重ね合わせてもいるのです。

インドの児童文学

インドにはたくさんの言語があり、年ごとにそのさまざまな言語で、たくさんの児童文学が書かれています。ある特定の言語の読者が、これらすべての作品を読み、知るということはできません。しかし、我々には利点もあります。それはインドに存在する『ラーマヤナ (Ramayana)』と『マハーバーラタ (Mahabharata)』という長大な二大叙事詩の存在です。この二大叙事詩の中には無数の物語が絡み合って存在し、それらは絶えず子どもたちの読み物として再生され、書き直されています。ですから、インドに住む子どもたちは、どこ出身であれ、どの言語を話していても、この叙事詩から生まれた物語を知っているのです。

ベンガルの児童文学

ベンガルには大変豊かな児童文学があります。その理由の一つは、ベンガルでは大人向けの作品で有名な作家でも、子ども向けの作品に進んで筆を取る傾向があることにありま

す。アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したラビーンドラナート・タゴール (Rabindranath Thakur、ロビンドロナト・タクル) も、子どものための詩や小説や戯曲を何百と書きました。彼の甥であるアバニンドラナート (Abanindranath Thakur、オボニンドロナト・タクル) はインドを代表する画家ですが、彼もまた、子ども向けの素晴らしい作品をいくつも残しています。これらの作品は、今日、児童文学の古典と位置付けられています。

タゴール家

このタゴール家はベンガル文学ではたいへん大きな存在です。タゴール家と一言で言いますが、これはとても大きな家族で、ラビーンドラナートには14人の兄弟姉妹がおりましたから、甥や姪だけでたいへんな数になりました。その上、それ以外の親族も合わせますと、かなりの大人数だったわけです。驚くべきことに、この一族は数多くの著名な文学者を輩出し、ラビーンドラナートの兄のひとは、ラビーンドラナートその人よりも才能があると囑望されていたほどです。この兄はラビーンドラナートに多くのことを教えました。自身の才能を十分に生かすことはできませんでした。いずれにせよ、タゴール家には真に文化的な環境というものがあつたのです。女性の教育というものが一般的ではなかつた時代にあつて、タゴール家の女性たちは、その多くがかなりの読書家であつただけでなく、何人かは文学界に大きな足跡を残しさえしました。実際、ラビーンドラナートの姉のひとは人気作家だったのでした。

レイ家

このタゴール家とは別に、文学と文化の世界で際立った名前を残したのがレイ家です。この一族もかなりの大人数から成つておりましたが、これもまた驚くべきことに、レイ家は児童向けの作品のみを執筆する文学者を数多く輩出しました。レイ家はまさに、児童文学に最も貢献した一族なのです。タゴール家と同様、レイ家にも、児童文学の世界で確固たる地位を築いた女性は何名もおりました。

ラビーンドラナートがタゴール家の中で最も著名な文学者であるように、シュクマール・レイ (Sukumar Ray、シュクマル・ラエ) はレイ家の中で最も有名な作家です。今日でも彼は児童文学界の王座に君臨していると言ってよいでしょう。彼のように才能豊かな作家であれば、自らそう望むなら大人向けの作品も容易に書けたと思いますが、彼は子ども向けの作品以外は書きませんでした。彼の作品から生まれた詩節は今では慣用句のようなものになっています。彼が作り上げたキャラクターたちは、その名前を口にするだけで、物語すべてがよみがえってくるほど生き生きとしています。シュクマールの作品に親しんでいないベンガル人など、真に教養あるベンガル人とはみなしてもらえないほどのものなのです。

児童文学を外国語に翻訳するのは極めて難しい作業です。シュクマール・レイの作品に

は素晴らしいユーモアが隠されていて、翻訳という作業をなおいっそう困難にします。そのため、彼はベンガル以外ではあまり知られてはいません。しかし彼の一人息子は世界中の人々に知られています。シュクマールの息子とは、かの有名な映画監督、サタジット・レイ (Satyajit Ray、シヨットジット・ラエ) なのです。とはいえ、そのサタジット・レイを知る人たち、彼の世界的に知られた映画作品、たとえば『大地のうた三部作』、『音楽ホール』、『森の中の昼と夜』などを知る人たちも、彼が作家であったこと、そして児童文学作家として絶大な人気を博していたことはほとんど知りません。彼の祖父もまた有名な児童文学作家で、実に 3 世代にわたって、レイ家は時代を牽引する児童文学者を生んだことになります。シュクマール・レイは非常に若くして亡くなりました。32 歳で重病に陥り息を引き取ったのですが、このときすでに非常に素晴らしい作品を書き上げておりました。息子のサタジットは父親が亡くなった時、まだ 2 歳半でした。彼には父親の記憶はありませんでしたが、父親の類まれな才能を受け継いでいました。サタジットの作品は何年もの間ベストセラーとしての地位にありましたが、今日でもなおその人気は変わりません。

おわりに

ベンガルの児童文学界にはほかにも才能豊かな作家が大勢おりますが、今日はここまでにさせていただきたいと思います。皆さまがお聞きになりたいということであれば、他の作家についても質疑応答の時間にお話しさせていただきます。先ほどからお話していますシュクマール・レイは、死の直前にある詩を書き上げました。彼の作品は通常とても面白くてユーモアたっぷりなのですが、この詩には唯一、そうしたトーンがありません。おそらく自分の死が近いことを悟っていたのでしょう。後年、息子のサタジットがこの詩を英語に翻訳いたしました。これからその詩を朗読いたしまして、私の話を終わらせていただきたいと思います。

雲の国の 霧の夜に

虹の橋の 揺らぐところ

リズムに合わすも 合わさぬも

喉を震わせ 歌うたう。

ここではなにも 禁じられず

わたしを阻む ものものない。

ここでは 明るい空の下

夢の波が 風に揺れ

歌に酔って 泉が溢れ

天空の花が おのずと咲く

空を彩り 心を彩り

時とともに 浮かび上がる

今日のこの 旅立ちのとき
心にあることを すべて言おう
意味があろうと なかろうと
人がわかるも わからぬも
私から私を 解き放ち
夢の流れに 身を任せよう
溢れる言葉を 誰が止めよう？
今日の私を 誰が阻もう？
今日の私の 心臓の中で
太鼓がどンドン 音を鳴らす
光に包まれた 真っ暗闇
その香りにて 警鐘は鳴る。
秘密の命に 夢の使い
舞台上で踊るは 五人の幽霊
飢えた象が ふらふらと
足を上げるは 無限の虚空
女王蜂に ペガサスよ
いたずら坊主は 良い子だった
原初のときの 凍る月
枝に下がるは 馬の卵
眠りの帳が 降りるころ
眠りにつくは 私の歌

(翻訳監修：丹羽京子氏)